
sky ash

ロースト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

sky ash

【Nコード】

N2459Y

【作者名】

ロースト

【あらすじ】

灰色の世界。青空は見えなくなって久しく、人々は太陽の下を恐れた。

環境破壊の末に行き着いた世界は化け物の徘徊する地獄。シンシオンと降り積もる、灰色の雪。少年少女たちはただ、明日を生きるために戦う。

*グロあり

*ヒロインは二章より登場

* B L 風味あり、N L

灰色の雪と呼ばれる化学物質の散布により、空気は汚染され建物は徐々に腐敗した。

過去、世界へ危機が迫った時に建築された人工的熱遮断塔（Artificial Solar Energy Seclusion）

通称AES塔。だが一時の救済でしか無く、それは更なる悲劇を呼び起こした。塔から発される化学物質AESが放射性物質を孕みRadiation AES RESへ変化し、有害物質となつて世界を包み込んだのだ。雪のように深々と舞い落ちる灰は見た目の綺麗さとは裏腹に人々を安全から遠のかせた。RESに感染した生物の凶暴化状態Loss Sense LSによる死傷者の被害と広がる感染。しかし人類は人口を激減させながらも生きる術を見つけた。都市に張られた防壁の外に出られないという制限を負いながらも生き残ることができる術、それが移動・転移型の都市。そのことにより他の都市との交流は一部手段を除き絶えたが、人類は外側にLSという敵をもった状態で均衡を保つようになった。安全ではない世界、明るくない未来。それでも人々は生きていた。一つの光に希望を寄せて。それが犠牲の上での上辺だけの光だということを知らず、人類は再び危機を迎えていた。

「ここが、シンクレス……」
踏みしめた土がジャリツと音を立てる。

閑散とした都市を散策する人物は「さすがにでかいな」と呟きを残した。

日中の明るい朝の日差しが彼の間に馴染んだ眼を眩ませ、色素の薄い異色の眼を細めたさせる。『都市』で作られた人工的な光だから光量を気にすることなく見上げることが出来た。

人工的な光でさえ見上げるのが久しぶりの彼には、太陽の懐かしみを感じさせる。

この『都市』は他の『都市』と同じように明るい。陽の世界だ。だが、『世界』は俺が辿る運命のように暗い、灰色の世界だ。

『都市』では『都市の中』だけが“彼ら”の世界。切り取られた、偽物の世界が広がる。それでも今は“ここ”が人間の世界で、一樣に鳥籠に住む。俺も、それに捕らわれたままだ。

学園都市シンクレス それがこの『都市』である。

ここが学園都市である以上、住民は一日の殆どを『学校』で過ごす。通常であれば太陽は頂点へと昇る頃合である今、もちろん人影は無い。街中は当然として空っぽ。皆が学校にいるはずだ。例外はない。だが彼は居た。

都市に降り注ぐ明るい光とは反対に、彼は自身を覆う暗い闇から抜け出せずにいた。

逃げて、逃げて、そしてここまで来た彼は自身で“負け犬”の名を冠す。

彼に繋がる影は後悔の荷を担ぎ、過去という錘を引き摺る。底を見せない黒は長く伸びていた。平穩が偽りの仮面と知る者たちが集まる場所。しかし、そこも楽園の一部でしかない。

本当の“果て”を知らぬ者たち。そうして、偽りの平穩に俺も身を浸す。

*** 要塞都市アキラム

「くっ」

一人の脱走兵が荒い息を殺し、身を隠す。その一瞬後のことだ。武装した兵士が2人、双方向から来て辺りを警戒する。幾重にも重なった足音は夜の空間に冷たく硬質に響いている。

「いたかつ！」

「いいや、次は」

奴らは無線で連絡を取り合い、徐々に網を狭めていく。ブザーは鳴り続ける。

多数の人員が投入され、危険度Aランクで警戒配備・索敵している状況。標的が見つからないのは彼が玄人であるからだ。

要塞都市アキラムの最高機密にあたる研究施設からの脱走。領内の軍基地で幹部に値する彼の實力。 相応して彼の日常は危険極

まりないものであった。

命がけの毎日とこの場からの脱走……どちらの生存率が高いのか。

彼が一般兵であるならば悩むことすらしない。どちらを選んだところで、天秤にかけた時点で両方に死が確定する。だが彼の實力は日々を生き抜かせる。命がけの毎日を際限なく続けるかこの場所からの脱走をするか。彼にとっては後者の方が格段、決断に相当するものがあつた。

兵士は通信を終えると去つて行つた。自分がここに居ることを知つたらどんな反応をするのだろう、と考え苦笑した。気を緩める間もなくその場を離れる。また隠れる。その繰り返し。

目的地は近い。彼がいるはずの、約束の場所。

「急がなくちゃな」

誰にも聞えないように、けれど明確な強さを持ってそれは呟かれ

た。

世界は変わった。

人類の科学技術は発展し、皆が疑問を持つこともなく便利すぎるほどの生活を楽しむ。人類は快適な生活に思考することを止め、怠惰に走った。

一方、一部の政治家などは加速する温暖化への対策は明確な解決案もなく、未完成の企画書や打ち切られる開発ばかり。未来より、よりよい現在を選択したことによる罪だと覚悟をし、真綿で絞められるようにゆつくりと向かい来る恐怖を味わっていた。

秘かに、そして緩やかに、終焉へと一途を辿っていた世界に残された手段はただ一つ。

人工的熱遮断気体層計画。

机上の空論と過去、幾度も批判され時の流れに忘れ去られた計画。熱遮断の性質を持つ気体を人工的につくり、人体に影響を及ぼさないよう人から離れた地域でそれを常時製造し続けるというもの。全てが機械によるものであり、監視カメラをつけて遠隔的に操作をする。

現在の技術ならば夢とはいわない。しかし失敗のリスクが大きい。万一、成功しても持続性もない、応急処置にしか過ぎない。成功確立なんてそれこそ低い。

それでも、迷っている暇も案もなかった。巨大な尖閣塔が常冬の山脈地帯に建築された。

人々は最善の対策・失敗時の対応を用意して計画を実行した。唯一成功を祈って。

かくして世界は二分の一、50%にも満たない成功を願い、成功を遂げた。

だがそれは短い平穏だった。

人類は予想以上に早い終結に解決案なく再び暗黒の時代へと、更に絶望を味わう世界へと陥れられた。それはA E S塔と呼ばれ

たその小さな事故による、突然の暴走という形で。

だから人々は一つの答えを出す。 “英雄” “聖女” という名の『贄』を差し出すこと。

彼女がどんな風に生きたか、それを知るのは僅かだった。それが危機に向かう“第二”の救世主を生み出した。彼女の血縁者である一人の青年、彼もまた『犠牲』へと選ばれてしまった。

「行くのかい？」

尋ねる彼に答える。

「そう……、手配はしてある」

暗い表情。彼の立場もあるから俺が居なくなることは負担だ。

迷惑をかけたくなかった。それでも、これだけは譲りたくない。

「ありがとう。世話になったよ」

「いや、私にはこれぐらいしかできないからね」

彼は幼い頃から俺を知っている。頻繁に会うことはなかったが、ここに来る前から随分よくしてもらった。両親のいない俺にも『父』のように思えた。

大丈夫だよ。ちゃんと、戻ってくる。約束は守る。

そう言っても彼の悲しげな表情は変わることは無かった。

「許して欲しい、秋登。私が……」

「気にするなよ、あんたは悪くない」

そう言っても彼の罪悪感は募るだけだった。

「……なら、約束がもらいたい。最後に自由が、思い出が欲しい。

俺は

後悔や罪悪を感じて欲しいわけじゃない。ただ、ワガママを聞いて欲しいだけなのだ。

少しの間だけでも、外の世界を見たい、それだけ。

俺は今日、ここを出る。そして、また戻ってくる。

暗い闇の中、落ちていくために……もう一度、近寄れないほどの眩しい光を浴びに行くんだ。

今の俺は……先の見えない闇で途方に暮れてしまっているのだから。
灯籠を探してからでないと歩けない。思い出が、全てを象る礎とな
る。

「 変化は水がスポンジに吸収されるが如く、急速に広がった。

散布される物質、RESの被害は目に見えて鮮やかだった。体内蓄積量は個別に異なるが、人を含めた動物はRESを体内に取り込むと身体の硬化、強制的な暴力衝動、自失状態などの症状を起こす。

つまり凶暴化し他を襲う。例えると小動物であるウサギやリスが通常の熊程に巨大化し、生物学的にも言っても本来が考えられないほどに変態する。

それらを隔離、いや人類の立て籠もりとも言うべき状態へと事態は移行される。

都市はNon RESシステムの導入によりRESからの安全を圖つたのだ。

しかし、RES化し人類の敵となった生物たちLSの狂気からは逃れられない。世界はやはり絶望の只中であつた。そこへ一つの希望が

」

プツ
ツ

映像が一時中断され、創つくは何事かとHMDを外す。他の奴らも同じく外していた。

学園都市シンクレス　そこでは日夜戦いが繰り返されていた。襲ばいものい来るLSに対抗するため生徒同士の試合が行われ、命を殺すための訓練をする場であり、そして何かを守るための力を養う場所だ。

しかし、今日に限っては戦闘の音は聞えない。二期制においての後期始まりの日。その日、彼らは一様に世界の成り立ちを聞き、知識の復習を行う。創も例外でなく、それに参加していた。

大きく開いた視界で改めてみる教室。視線を巡らせれば副担任の朝

日が扉のところまで担任の雪時と話をしていた。

「ああ、はい。聞いていますよ。はい、分かりました。わざわざありがとうございます、先生」

雪時と話し終わった朝日は向き直り、皆がヘッドホンを外したことを確認して話し始める。

「今期より入学した生徒が来たので授業は一時中断して、紹介したいと思います。さ、入って」

朝日の後ろでドアがスツと開いて青年が入ってきた。

「っ」

ドクンと創の心臓が一際大きく拍動する。

先ほどまで映像を映していたスクリーンを背にして立った転入生は紅い瞳を持っていた。彼の容姿はひどく平凡で、肩につく長さの黒髪と瞳の色以外には特徴がないくらいだった。細い腰に巻かれた金屬ベルトや指に嵌められた指輪、服の中に納められていると思しきペンダントのチェーンが見え、大人しい風貌に申し訳程度の印象を与えるくらいか。何処にいても埋もれ、紛れてしまう特徴の無い青年。けれど創は彼を見た瞬間からある人物を思い浮かべていた。

昔見た人物を思わせる雰囲気。だがその瞳は記憶と被らない。無感情に瞳を彩る紅は珍しい色合いだ。一度でも会えば忘れるわけがない。記憶には誰一人それを持たない。見覚えがない。

別人なのか、同一人物なのか。判断しようにも、今の創にはその材料がなかった、

「秋橋あきはし 涙だ。なみ よろしく」

ガツンと頭を殴られたような衝撃を受けた。記憶の声が反響するように、頭を揺らす。その存在は新しい季節の到来を告げるように創には感じられたのだった。

意図的に造られた笑顔がそこにはあった。けれどその瞳は寂しげに揺れ、絶えることなく風が吹き荒び、その色は乾き褪せる紅葉の傷

色を現していた。

彼はその情動を一瞬にして消し去った。瞳はどこも見えていない。感情なく、虚ろへと変化する。初めて会った彼に何故こんなことを思うのか。彼をかつての親友と決めかかる己に問う。余りにも違うと否定するのは簡単だ。しかし 記憶の中の人物だと、直観させた。記憶は鮮明だ。けれど肝心な顔の部分だけ、霧がかかったように思えない。それが創にはひどくもどかしい。

ガヤガヤと皆が席を立ち移動する休憩時間に俺へと声をかけてくるものがいた。

「おいつ……！！」

急に捕まれた腕を反射的に振り解いて振り返る。乱雑な扱いにしかめていた眉がその人物を目にして更に険しくなる。しかし男はそのことに気付かず、そして他も気付かない。

声をかけた側と声をかけられた側の2人を退けて人の波は早々に四角い箱から流れ出ていった。生徒の波に乗らなければ転入生という存在は次の授業も何も知らず、どうすることも出来なくなる。俺は前の時間は移動教室だったので教室の場所すらわからない。教師も少し気を使ってくればよかったのに、と恨みがましく思うのも無理ない。そんな時に事情も考えず声をかける奴も最悪だった。初日に、しかも数時間も経たず目を付けられるなんて。

「戻って、きたのか……」

目の前に立つ男は呟く。信じられない、とでもいうような不安定な声音。

先程は俺の自己紹介のみをし、授業は再開された。だから俺には未だ知り合い、声を掛け合ったクラスメイトなどいない。けれど男は声をかけてきた。

そして俺は、その男には見覚えがある。　　以前からの知り合い。それでもこの場所で会うには不資格で、同時に“秋橋 涙”の知り合いでない。初対面だった。

「何の話」

感慨もなく、淡々と返した言葉に男の感情が高ぶったのを感じた。その端正な顔立ちに感情が馴染み過ぎている。表情が出やすかった。いや、顔全体で感情を表しているといっても過言ではないほどに、

表裏がなかった。

「　　つ　忘れたのか？」

傷ついてみせる男の表情に、揺れる瞳に、心が粟立った。しかし、俺は今日、転校してきた秋橋　涙だ。知らんな、お前なんて」
平坦な声音で放つ言霊の刃。存外にお前なんて知らない、と伝える。煽られた感情は既に平常へと戻っている。何の感情も呼び起こされない。

感情は月の引力によって潮汐する海と同じ。しかし、それは湖でもある。波紋が広がったとて、どうやって波が立とうというのか。水面は心を映し出す。水底は暗いのも必然だった。

「　　だいたい、顔も憶えていないような奴と重ねるなんて　　」

「　　なんで知ってるんだよ」

「　　？何が　　……っ！」

指摘されてから自覚する。

今、俺は何を口走った？当人以外、知っていちやいけないことを言わなかったか……？

「　　7年前のことだ。随分昔だし、子どもの頃とは違ってると思う。

でも、そんなことじゃなくて、顔自体俺には思い出せない。」

「　　……」

「特徴のない顔。本人は覚えられにくい、って言ってたけど異常なぐらい覚えられない顔だった。直前まで会っていても、振り返って思えば顔が分からなくなる。そんな奴で、でも、そいつがそいつだと俺が証明できる唯一つは」

抗議も空しく利き腕を押さえこまれた。左で振り払おうとしてもう一方で掴まれる。簡単に無力化されたことに得体の知れない怯えが奔る。たった一つの失敗で導かれる真実に俺の動揺は最高潮に達する。

「　　やめ　　」

「　　このペンダント。俺が、送ったものだ。手作りで、同じものを持つものはいない」

捕らえられた。服から引っ張り出され、胸元に揺れるペンダント。金のチェーンに通された透明な玩具のピンが俺には重い。それは“秋登”が持っているはずのものだ。“俺”が“秋登”だということを決定付ける明確な証拠。

「アキ　っ」

「知らないって、言ってるだろっ!!」

大仰な動作で腕を振り払い、言い逃げのようにその場を去った。その背を声が追う。けれど男自身は来ようとしなかった。そのことに胸が痛むことはない。当然だ。俺は遊びに来ているわけじゃない。心の警告に素直に従う。

“これ以上、アレに関わるのは危険だ”

俺は一人だ。友人も協調性もいらぬ。感情も不要。邪魔なだけだ。今の俺に最も必要なこと、それは目的を果たす。ただそれだけのために俺は存在する。

「俺は今日、転校してきた秋橋　涙だ。俺はアキという人物じゃない」

俺は繰り返す。そして否定した。

己に言い聞かせるように、感傷など抱かなくてすむように。声なき声で、真実を偽る。

記憶を頼りにして流れの途絶えた生徒の群れを急ぎ足で追った。同じ組と思しき連中を視認して、ようやく速度を緩める。思考の端に引っ掛かるものなど、忘れたフリをして。

俺は転入生の背を見送り、改めて思考する。

…… 転入生はアキ 秋登だ。

7年前、創の前から消えた親友である。心で確信する。

出会った頃の秋登は両親がなく、血の繋がった家族はお祖母さんと姉の泪なみださんだけだった。祖母の経営する孤児院の子どもたちを家族と呼び、幸せな、けれど区切られた世界に存在していた。それが小さな箱庭でしかなかったのをいつ気付いたのだったか。今でもその純粋な瞳と泪さんの綺麗な髪が記憶にはつきりと残っている。

お祖母さんが死んで、すべてが壊れた。子どもたちだけで上手いく訳がなくて、泪さんは国に連れていかれ、秋登はそれについていった。子どもたちもいつの間にか消えていった。

皆がいなくなり俺に残ったのは廃墟となった孤児院と約束だけだった。今は何もかもが遠い。

もう会うことはない、そう思っていた。 数年ぶりに見かけた秋

登は変わっていた。名前が、声色が、俺を知らないという態度が、

…… 瞳が変わっていた。紅の、精彩を欠いた瞳。秋橋 涙は“秋登”であることをペンダントが教えてくれたのに。

…… 7年前だ、顔なんて変わっているだろう、性格も変わっているかもしれない。けど。

勘が告げる。警鐘が鳴った。“アレに関わるのは危険だ。” 戦

闘における最も信頼の出来るもの。それが勘だ。それが告げる。

俺にとって一生ものの友たちだった。たった一人の親友だった。

今でも大切な人だ。答えなんて始めから出ているのに、選択肢なんて必要がないほど答えは決まっていた。

「秋橋、午前はこれで終わりだよ」

転校生である秋登に教えてくれたのは佐竹さたけ 戻れいだ。

この学校は特殊だ。学園都市はそれだけの特異性を伴うからだ。戦鬪に慣れさせ、LばけものSと戦うことを義務付け、国へと献上される兵士の養成所。命を賭して世界を守るために集まった生徒たち。だからこそ転入生は珍しい。転入生である秋登に多くの者が視線を向けてくる。だが遠巻きにして話しかけてくる者はいなかった。いや、その隙を与える間もなく佐竹が来た。この同級生は生徒たちの中で確たる地位を取得しているらしい、と周囲の雰囲気から読める。

佐竹は「一緒にお昼どうか？」と提案してきて、秋登は頷いた。

「午後は鍛錬だから昼は早めに切り上げないと時間がないよ」

佐竹はどうやら先ほども気にかけてくれていたようで、教室に戻るついでに色々説明をしようと思っていたらしい。それがあの男が話しかけるのを見て先に帰ってきた、とのこと。

生徒と教師しかいない学園都市は親も世話役もない。一人暮らしか寮での共同生活。つまりはどっちにしろ自分の事は自分でやらなければいけない。制服にしわがついていたりほつれていたりするものが当たり前というような雰囲気さえある中、佐竹はキチツと正規の制服を着こなす。自由な校風故にどうか、戦鬪で邪魔にならないように制服の改造は許可・推奨されている。実際ほとんどがそれで転入初日である秋登でもやっているのだが、佐竹はそれが一切ないという完璧な優等生。転校生が最初に仲良くなる人物として佐竹は最高の人物だった。

ところで秋登は今、ある人物から視線を浴びせられていた。先ほどの男だ。名乗りもせず到手前勝手な感情をぶつけて激昂した人物。

視線を合わせれば向こうから外すかと思えば、そうでもない。男は観察するように度々目を向けるが、近寄ったりはしない。周りから見れば不審にしか思えない行動であることに気付いていないのだから。イライラが募る。

鈍感なのだ。何事にも、気付いていない。自分に寄せられる好意も、敵意も、何もかも。そんな気持ちに気付こうとさえしていない。無意識のうちに視線を逸らしているとまで思える。

「佐竹、あいつ何」

最高潮に達したイラつきがとうとう口に出る。

「山戸 創。普段はあんなんじゃないんだけど、……風習に染まったのかな？」

首を傾げる佐竹の仕草は人目を集めた。特別な動作でもないのに注目を浴びるのは男だらけの教室で華やかさを身に纏う者の宿命、というやつだろう。

……“山戸 創”ね。

聞いた名に隠しようのない違和感を覚え眉が寄る。どうして創ではなく創と名乗っているのか。けれどあえて話題を摩り替える。

「風習って？」

「聞いてないの？」と逆に尋ねられ、頷けばフム。とばかりに佐竹は考え込み、しばらくして答えが返ってきた。

「風習って言うのは本物の恋愛は希少ってことだよ」

「……。いや、わかんないし、それじゃ」

「特殊だからね、この学園」と言われてもならばその特殊を話してくれ、というのが本心だった。佐竹がはぐらかす話題。そのことに躊躇いが生まれる。これから自分の暮す場所のことだ、知っておきたい。変な沈黙が生まれる。佐竹は「食べながらしよう」と無理矢理気分を変えた。既に2人は移動の準備は会話中に終えていた。

「ああ、そ」

「俺が説明するよ!」

……うだな。

余計なことを言い腐って人の台詞を邪魔する奴を見る。割り込んできたのは横の席の男子生徒。立った拍子に音を立てた椅子をこちらに向けて座り直す。

「俺！雀 ユウ（すずめ ゆう）。よろしくっ」

元気よく挨拶をする姿は幼く見えた。14歳ぐらいか。雀は赤っぽい茶髪にふわふわした癖毛。子供独特の中性的な顔立ちが残っている。佐竹の綺麗な顔とはまた別の整った顔立ち。

美形が多いな、と素直な感想を抱く。

「たった今食事しながら、って帰結させた話題をわざわざ割り込んで話すんだ？」

時間を取らすな、という意味を皮肉たつぷり言外に告げる佐竹。雀は「わわっ待って！」と言って慌てて移動準備を始める。他の奴らのように怯まないのは天晴れ。2人のコミュニケーションはそれで出来ているらしい。というか佐竹が従えている様子。

「ここは厳しいからー女子どんどん減っちゃってー少ないんだよ！本当はもっと多いはずなんだけどねー。入学から今日まででも相当数が減っちゃって」

用意しながら話すとは、どれだけの執念。いや、主張か。

雀が話すとおり、ここの男女比率は7：3だ。だからこそ状況風習は加速する。

「しかも女子は女子でも、貴族のこっわーい子女かムキムキでちょっと恋愛対象には……コホンッ！ そんなわけでっ！」

雀はいつしか佐竹を追い抜かし先導していたのでわざわざ振り返って、ズビシツと音を出しそうな勢いの指を立てる。秋登は間近すぎてブレているそれを見ると曲げたくてたまらなくなった。

……こう、曲がらない方へえいっ！と。……しないけど、ウザイよな。

「崇拜対象・憧れが過ぎて擬似恋愛になったりするんだよねー。学校機関だし遊ぶのも満足に出来ないから、鬱憤溜まった奴らが新しい遊びかゲーム感覚でさあ」

佐竹から白けた、いや突き刺さる氷の視線を感じたのか付け足す雀。「だっていつても美形2人並ぶと絵になるーとか。話しかけられた、キヤツ嬉しい！程度だし」

秋登は思考が危ないところに向いているな、と自覚する。イメージが“青春”的なドラマか映画しか思い浮かばない。感動、汗、涙、熱血……と単語が羅列する思考。ムサイな。

「じゃれあいで抱きつく、とかボテイタッチが多めとかそんな感じか？」

雀の話し方が煩い。ついで行動も。周囲から向けられる興味津々、好奇心旺盛な視線や大っぴらな誹謗中傷に交わされる噂、丸出しな悪意の視線。それが秋登を苛立たせる原因だった。

「そうそう、フレンドリイ系。男ばかりの王様ゲームでキスしろって命令が出たーとか、女装命令されたーとか。そんな悪ふざけが横行する感じ」

「だから大丈夫イ！」と親指を立てられる。いや、指立てられても「折っていいですか」ぐらいの言葉しか出ない。

「……まあ、それぐらいなら、な。でもそれって恋愛なのか？」

雀は基本無視。佐竹に話しかける。

「うーん、何とも言えない、かな。殆ど冗談で言っているようなものだよ」

佐竹も乗ってきて雀が嘘泣きをする。まあ名に因んだ行動なのだろう。ピーチクパーチクと五月蠅い。ちっちゃいし。いや、それでは蠅か。

「まあ、仕方ない。こればかりは諦めるしかないよ」

あはは、と苦笑で返されて苦笑で返す。

「で、アイツはどうなんだよ。そんなフレンドリイとかじゃないんだが？」

話が一段落したところで再び視線をやれば、山戸 創がいる。美形が怒ると怖いというけれど、アレは怒っているわけでもないのに顔が怖い。話を聞かれていたわけじゃないだろう。単に転人生は“秋

登”なのか、と疑っているだけで、こここの恋愛事情とは全く関係ない。

……ああ。昔の“俺ら”ならば、ここではそう見られたのかもしいない。

「アキ」

目が合ったのだ、秋登と。久方ぶりに会えた親友に感情が溢れるのに、それは逸らされた。それは塞き止められた感情の箍を外すのに十分な動作だった。

「アキっ」

思わず、近寄った。下に落ちた影を秋登が見つけ、見上げた。もう、止まらなかった。

疑問はいつぱいで、尋ねたいことも問い詰めたこともたくさんあった。でも、この7年間の感情は止まらなかった。思いの丈をぶつけるように身体を抱きしめる。

涙が、止めどなく滴り落ちていった。秋登に知らしめるための、罪を負わせるための、涙。卑怯でもなんでもいい。ただ、その存在が、凄く大切で。失って、なくしたことにさえ気付かないままだった。目の前にあつて、手に入らないと思つて、それからどれだけ大切なものだったのかを思い出した。今更ながらに自覚した。

「っ放せよ！」

気付けば真上に影が落ち、抱きしめられていた。自身を拘束する腕を無理やりに解こうとして、気づく。幼い頃でも敵わなかった力が、今でもびくともしない。男らしい身体つきに腕力、変わらず振りほどけない己の体格が憎くなる。昔とは違うはずなのに。思つたのは一瞬。それ以上に、衝動に近いものが背筋を駆け上がった。

「触るな変態！」

剣を投げ飛ばしていた。無意識に鳥肌の立つ腕を擦る。

「……………」

佐竹と雀からの視線が痛い。ビシバシと当たっている。感動の再会じゃなかった。

秋登は腕力ではなく実力で振りほどいた。なのに創の中では何も成長していない。2人の絶対的立ち位置は変わらない。守られるだけの、弱い自分のまま。否、“秋登”も、“創”も変わった。年月は2人を変えた。だから今、2人はこんな所にいる。あの頃のままでは、いられない。実力を付けた。秋登はもう、創より強い。既に守る側に立っている。

「……すまん。つい、条件反射で」

投げ飛ばした先、無様に壁へと激突した創に対しそう言って慰める。秋登は自分で言っていてその言葉に違和を感じた。条件反射、などと。

「アキ！」

急にガバツと顔を上げて伸ばされる腕。創は殴り飛ばされたことにも何も感じずにいるのだろうか。周囲からの視線にもめげず、秋登を抱きしめる。創の行動一つ一つに反応する周囲。増えた悪意の視線、いや殺気。

……それでも、肩口を濡らす水が、乾くまではせめて。

昔を、懐かしみたい。懐かしませたい。悲しみを吐き出させたい。

このまま、自由に。

だが抱き締め返す腕はない。両腕は力なく、垂れたままだ。そんな資格、ない。

秋登は“捨て”た。あの場所を、あの過去を。涙も感情も消し飛ばしてここまで来た。“秋橋 涙”を名乗り、以前と違う姿で今ここにいる。

それはお前も同じはずだ。

“山戸 創”と名乗るからには、秋登の知っていた“山戸 創”ではない、けれど口に出すことは出来なかった。あの日の綺麗で悲しい涙が思い出されるから。何も出来ない。秋登に、幸福へ足を踏み出すことは許されない。

拒絶するほどの強さも勇気もなく、身動きすら出来なかった。無力なのは強くなっても同じ。相変わらず、秋登の周りで命が途切れていく。

……だから俺はこんな自分が大嫌いだ。

「で、具体的に鍛錬ってどんな授業なんだ？」

食堂へ向かう途中、俺は上機嫌だった。けれど秋登は不機嫌だった。原因は自分だ。佐竹へとかけた疑問にも疲れが見えている。それでも秋登を開放するつもりはない。創はわかっていて、その背を抱きしめるようにくっついていて。離れた間の年月分のコミュニケーションを取る。本人は引き剥がそうと労力を費やしていたが、全くの無駄である。先ほどは返り討ちにあつたが今回はそれもされていない。

「授業というより自習の面が強いのかな？ 訓練所の一角で行うんだけど、仮想空間で各々戦闘シミュレーションや身体作りメニューを実行して過ごす。大部屋があるから、複数人で利用も可能だよ。ネットでも通信もできるから、会話や一時的な介入なら大部屋に行かなくてもいいんだ。午前授業で使う時は全ての回線を繋げちゃうんだけどね」

「一緒にやろうぜ」

せっかく入った会話を無視され、あげくに顔をぐいーっと押しやられた。頭一つ小さい秋登が手を伸ばす様は自分が虐げられていることを覗いてもほのぼのする。

「ああっ！！山戸様っ！！」

ああ、置いてかれる。

そのことに気付いて、身体は急激に冷める。心もそうなりそうで怖かった。だから、手を伸ばす。受け取ってくれる手はないけれど、それでも必死に伸ばした手は届いた。

心は恐怖に捕らわれることなく、手は秋登の制服を掴んでいた。振り返ってはくれないけれど、喜んで迎えてはくれないけれど、それでも旧友は今でも拒絶しないでくれる。

それが嬉しくて、それだけが真実だった。疑問なんて、片隅でい

い。例えば、『泪さんはどうしたの?』と7年前のあの日、会うこととなくなつた起因の日、彼は彼女を追いかけて行った。だからこそ知りたい。でも、今は、『秋登がここにいる』それが答えだ。それ以外にない。

「で、教師は?」

秋登は佐竹に質問を続けた。佐竹の表情は若干引きつっていたがきちんと答えてくれた。

「あ、ああ……。教師は基本的に空間内へ干渉することはない。ただ、映像は送られるし、不審な行動はすぐ分かるようになっていて。成績もそれで決まってくるし」

観客は完全除外で制服の裾を握ってくる七転び八起きに秋登は感心半ば呆れた。しかし無視。歩きにくい行為を強行する奴はスルーしていい決まりだ。

「サボれないってわけだ? そちらの雀くんは先ほどからどうしたんだよ」

始終ソワソワと窺うようにこちらを見てニヤニヤしているのがとてもウザかった。

「山戸さんっ!私、あなたが」

「山戸様!私のことを知ってもらいたいです……っ」

「ずっと前から好きでした!」

「初めて会った時に確信したんですっ」

「一目ぼれなんですっ」

離れた物体に群がる生徒どもに創は囲まれた。そして始まった告白大会。秋登は創に掴まれていた裾を払い、巻き込まれるのを回避。動けなくなつた創を他所に3人は進んでいく。

「えっ!? いやだつて、『あの』山戸が懐いてるしー気になんだよねっ。聞きにくかつたんだけど、俺の好奇心がーっ!ー!」

……テンション高いな、おい。

佐竹と違いすぎだ。これでよく友達やっていける。2人が幼馴染と

いうことに吃驚だ。「ガーガー」とエコーを掛ける雀は話題の人物を置いていつていることに何の感情も覚えないらしい。振り返ることすらない。否、集中すると周りが見えなくなるタイプで気付いてないのか。

「はいはい、わかったから熱を下げるよ」

喚く雀は破壊力抜群だ。佐竹が頭を抑えている。周囲も同調するかのよう騒ぎ立てはじめる。創が戻ってきたようだ。屍となって。

周囲が興奮する理由はもちろん、秋登。そして創のせいでもあるようだ。

「謎の転校生現る！」という傍迷惑な新聞を出して生徒どもに見せ回ってくださりやがった輩がいたようだ。授業をボイコットまたはサボタージユをしてまで書いたのか、先ほどの情報も入って配られた。(＋揭示) するための注目ではあるが、雀が(叫ぶ)目立つせいでもある。

会話の内容は聞きかじるに、雀と佐竹が仲いいだとか、創がかっこいいだとか……。佐竹や雀は創と同様、何かと注目される人物である。成績や戦闘スタイルにしても容姿にしても、人気があったりする。秋登のせいではなかった。

「はたしてその関係は!？」

マイクを持たない手でリポーターのように秋登へ質問するが、答えは味気ないものだ。

「知り合い」

「切捨て!？」

「うっさい」

おおー的確。佐竹はギャーギャー騒ぐ雀に一蹴。バコンと良い音が鳴った。これこそ切捨て。

食堂の大きく開かれた扉を潜る。騒然とした空気が身に触れ、一瞬体が拒否した。

「てか、山戸キャラ変わってなー？」

カウンターで注文している時だ。雀にしたら何気ない質問。列に並ぶ際の暇つぶし。

「そうか？」

創は意外に思う。変化というものは実際より、本人に悟りにくい性質があるとは知っている。でも己がそうだとは思わなかった。変わってみえるというのなら、それは周囲が俺を知らなかっただけだと思っ。だって、俺は俺だから。

「ふーん？俺の前ではいつもこんな感じだけど」

秋登が知るのは創だ。ここにいる山戸 創ではない。本当の創は秋登の前にいる創だ。それこそが素。今までだって何も偽ったことがなかった。それでも、曝け出しはしなかった。ここでの創は軍人だ。そして秋登の前にはいたのはあの頃の、幼い頃の友人。これほど決定的な差が他にあるだろうか。けれどそんな心情を秋登は何一つ理解していないだろう。その注目は今、雀でも創でもなく、視線の先の夕食だ。

「あの爽やか王子がこんなになるなんてね」

秋登は佐竹の言葉に不思議に思った。雀の話はあまり真剣に取っていなかったのだが、佐竹が言うならば、本当に変わって見えるのだろうか。

……俺が来たから、か。

「誰にでも平等に優しい、紳士だってみんなに思われているのに実態はこんなに偏る性格もとい変態気味だったとは」とは佐竹の言葉。……いやいや、変態って言っちゃってますよ。

基本は逆。佐竹から爽やか王子と呼ばれる所以は創の無意識な、本質的部分だ。

「まあ、スキンシップが激しくなったような気がしないでもないよ
うな……」

秋登は人との距離の取り方が分からない。ついこの間まで周囲にいたのは大人ばかりで、そうじゃなきゃ変態じみた変人か、いきなり敵意をむき出しにしてくる奴ばかり。友人は後にも先にも創だけで、一番仲が良く、同世代だった。創との距離が秋登にとって普通なのだ、判別がつかない。以前の記憶を掘り起こしながら首を傾げる。一緒に買い物に行き、洗濯物を取り込んでもらって、料理の手伝いをしてもらって、子どもたちの看病や世話、昼寝もしたしお風呂にも入った。子供同士のじゃれ合いで、さして気にしてもいなかったことだ。本当に家族のようにして過ごした。優しげなああの頃の記憶と忘れられない大切な約束が思い返されて頬を緩める。

これを過剰というのなら、“埋め合わせ”なんだろう。7年間の空白のための。

……罪滅ぼしというのなら、俺の方がすべきだというのに。何も話せていない、何も言わない。そのことに罪悪を感じる。本当に大切な事は何かを、秋登は知っている。

「離れていた反動だと思ってそのままだったんだけど、このままだと秋橋がやばいかも」

雰囲気が変わった佐竹に疑問が浮ぶ。

「王子様に憧れる少年少女は多かったですこと！」

心情の理解などという繊細な部分が全く見つからない雀が言葉に出してもいない疑問を返してきたので、そこまで分かり易く怪訝な顔をしていたか、と数秒前の己の態度を振り返る。

「秋橋は感情が出にくいよね」とタイミングよく佐竹が返してくるから、余計に思考が深まった。表に感情が出にくいのなら心が読まれているんじゃないかと疑いを持って、答えは出ない。仕方ないので適当な答を返すと佐竹も苦笑する。

「転校生！あなた何様のつもりなのっ！！」

「山戸様になんて扱いを」

「ああ王子！」

……ああ、こういう集団ね。

納得は一秒もかからなかった。たった今揶揄されていた人種だった。秋登が食事やら飲料やらを持っているのがわかつているのかわかっていないのか、通せんぼをして非難する。

「あー創をほつといていいんですか。くつつくなら大人しく好きな人にくつついてればいいでしょう」

適当に言葉を返し、赤面するなどというわけの分らない（妄想のなせる業だ）行動をする彼女らを素通りして進む。創は生贄に置いておく。恨みを買った覚えのない、見知らぬ大勢から向けられる悪意。話を聞けば聞くほど「なるほど」と納得できる現状だった。

佐竹は弓道、剣道、柔道、空手、合気道などの和系武術が得意。雀は双剣・体術使い。両人とも使い手が少ない戦闘タイプのためもあって目立っているらしい。

創は色事に無関心・淡泊な性質なので全く気付いていない。自分に冠される“王子”の名に疑問の余地を持たないのは一度“人気”として新聞に取り上げられたかららしい。それは“純粹な”意味の好意にのみ解釈していた。

持ってきた食事をテーブルに乗せる。

「っ」

殺気に振り向く。

ヒュン　　ッ！！カカツ！！

一瞬で飛来する3本の凶器。風を切る音と刺さる音。一本は壁に刺さり、二本は秋登の手の中に収まった。

その場に集まる皆がその挙動を観察していた。軍人養成機関に途中から入って来る程の実力。それを見極めようとしていた。実力を証明してみる、という視線が集う。

秋登は食食用ナイフが投げられたのを眼の端に映し、刺さる前に横から掠め取る。狙いは眼。防げなければ潰れていた軌道。威力も十分ある。慣れた手つきの、鋭い攻撃。容赦はない。

死角から投げられた二本目は身体をずらして避け、手刀で運動を外部から変更した。横へ行くナイフを上から衝撃を当てて止めたのだ。結果的に学校の備品は一本、折れた。

最後はフォーク。二つ目の凶器が投げられた後に投擲されたものだが速度はこちらの方が上だった。二本目を受けてからの行動では回避できない速さに他二つのように手に取る事はできず、避ける動作をした。明らかに前二本とレベルが違う熟練度を匂わせる攻撃。

三本目は今でも壁にびいんと音を鳴らして振動していた。

「っ」と、早速だねー」

雀の楽観的な口調にこれは日常茶飯事なのか、予測された行動だったのか。と疑問を浮べる秋登。それは前者が半分、後者が全体的に当たっている。この事態は公然とした日常にある。

狙われ奇襲を掛けられることが、武器が飛んでくることが、通常の世界。学友ながらもいつでも誰でも敵。引き摺り落とされる前に引き摺り下ろせというのが常識として染み渡った生活。

手に受け止めた二本はテーブル隅に置いて、漸く席に着くことができた。

食器を使って行われた攻撃。生徒たちは各個人で得物を所持している。武器を私用で使うのは控えるようにといわれているが、“控える”とは“禁止”ではない。得物を使うことはできた。けれど食器だった。それは秋登にとって良かったことだ。得物ならば流血沙汰になってもおかしくはない。秋登の得物はすぐに取り出せない状態にあるからだ。

秋登の武器は特別なものだ。形状記憶をさせた特殊金属。それを鍵によって変形させ真の姿を現す武器 “朝顔”。現在は休止状態のため武器の形を保ってはいない。しかし武器の形態化は3秒もあれば出来ること。問題は調整だ。それには当たり前のように時間が掛かる。手持ちにある間に合わせ調整器具では最高でも最速でも最悪でも、数分掛かる。

「前にも何度かあったんだろ。どうなったんだ、その子達」
眉をしかめて疑問する。

「答えよう」
敵かな声が響く。

「消えていった。その後は知らんな。弱いものに生きる場所などない」

カツカツ、と高慢な音が鳴り響き、食堂には静寂が広がる。ざわめきが消える中、カチャカチャと食器を操る音が一つ。

「流石は、といったところか。転校生？」

「いただきます」と呟き箸を割って一口を持ち上げる。背後からの

声は問い返すまでもなく秋登への言葉だ。疑問に答える、知らない人物からの応え。気配は露ほども隠されずにいたので男が背後にいることに驚きはない。

しかし、だ。絡まれる謂れは無いとも思う。多少目立ったとて、その原因は周囲の人間。秋登にはないと認識している。箸を置いて、けれど振り向かず応じた。

「あんだだろ、3本目を投げたのは」

ここは食事を取るための場所だ。正面から対峙することもなく攻撃だけして話しかけてくる、見知らぬ者に礼儀を払う必要もない。そんな意味はこれっぽっちもない。それでも、話しかけられて尚、食事を続けるほどには礼儀知らずになりたくないのです、秋登は水を飲むに抑える。

「負け犬でもそれなりの実力はあるらしい」

「っ！あんだ、……何、知ってやがるっ」
低い唸りのような問いかけが口から漏れる。

暗に過去を示す言の葉に振り向きざまの一瞬で変化させた武器の刃先を首へ向けた。完璧に調整のことなど忘れていた。だが錆びているわけでもない鋭い鈍色を力加減もなく押し当て、語気の荒いまま問いかければ、返ってくるのは赤を流した嘲笑だけ。

「はっ！よく、こんな場所へと顔を出せたな」

この場所は軍人になりたい者が集まる場所。軍用施設。そんな場所に、学生として軍人が来るなんて、どれだけ馬鹿にしているのか、と。それは安い挑発で、冷静ならばその裏が読めただろう。けれど、秋登は冷静になれない。琴線に触れたのだ、この男は。

「何処で何を知ったのか知らないが 口出ししないで貰いたい！
……人の内面へ勝手に触れて良い程、あなたは偉くなんかない。勿論、親しくも」

鼻にかけ、馬鹿にした笑いを前に噛み付く勢いで言った。それは忠告というより警告。

……あの日々を、あの光景を、実際に見てもいない奴が、体験したわけでもない奴が、知ったかぶりをするなっ！！！！
えそうになるのを、拳を握り締めてやり過ごす。 そう、吠

「俺はここでの権力者だ。口答えまでしたんだ。ただで済むと思っ
なよ？」

男は口元を歪ませた、わざとらしい軽口。そこにあるのは高慢で高圧的、過剰とも言える自信に満ちた眼。それが秋登に向けられた。その藍色の輝きが口以上にその性質の凶暴さを現す。

ここでの権力者、つまり生徒会役員。生徒の中の生徒。年齢関係なく、選ばれた実力志向のエリート。緊急時には理事を除いた、学校全体において指揮権を持つことが許される立場。この都市において

は教師よりも重く、理事を抜かした誰よりも高いその地位。しかし、それは軍行きを見送られたものの末路だ。生徒以上の實力はあっても足りない者と認定された、選ばれなかった者という意味。敗者。

軍直属の称をもつこの学園都市機構シンクレスは各行事に地位ある軍人を招待することが出来る。招かれた彼らは注目ありと事前に星のつけられた人物内からスカウトをする。要はその者に気に入られれば結果實力が足りなくても軍属になれるという制度。

そして、3年次までに選ばれなかったものは選択を強いられる。所謂 軍人とならず、それぞれ違う道を歩むか、軍人に拾われるのをここで待つか。

その欠落が、性格に現れていた。生徒会章の横にある、学年を示すバッヂが胸元に光る。派手なだけの実ない金属は学年や歳が強さには関係ないと主張する。過ぎた自信は死を迎え、好戦的な性格は思考を鈍らせ死に急がせる。また、生徒を支配下に置く程度のもので満足するような奴はあそこではない。下手の上に立つことを覚えていく人間が入れば扱いにくくなるだけだ。意地やプライドを守って無駄死にするか任務をこなせなければそれこそ問題になる。…これが男の選ばれなかった理由。他の軍人に、共に戦場へ立つには早いと思われた要素。

「人の上に立つ者なら下の者の内面にも気を配るのが責任でしょう。それを、捕まえて傷を抉る行為は愚鈍か慢心者の思考だ」

秋登は主張が出来る。それだけの経験と實力がある。人を指揮することに慣れている。“お前なんかより立場は上なんだ”と本能に知らせる。言葉で、目で、雰囲気、存在で。

だが一方、奴は指摘にも言を返すことなく眼で語る。ほら、やっぱり。『目は口以上に語る』それは思考が感情に追いつかないことを示す。だから笑う。秋登は優位に嘲笑する。

ぐうー。

かわいらしい音がざわめいた食堂に静寂をもたらした。

「……はあ」

視線をずらして雀を見れば気まずそうに視線を他所へ逸らしていた。
「おなかを空かせた子どもがいるようなので、さっさと退散して欲しいんですが」

「うっ……仕方ないだろう、生理的現象なんだからー」
いや、いいタイミングだよ、こいつと違って。

心の中だけで褒めたが現実には影響しないため、雀は尚もぶつぶつと拗ね続ける。そのままだと佐竹にまた怒られるだろうに。後で頭を撫でてあげよう。

「……用は終わりましたか。無いなら離れてください、不愉快だ」
食事が不味くなる。そう作り笑い、侮蔑をこめた眼で長身を見やる。
「さっさと去れ」と眼で語る。

「まだ用件は終わってない」

「ああ、まだいたんです……」

男の台詞に苦く思いながら振り向いた、その視界が暗転する。

「っ!?!?」

なに、された?

「胸糞わりいことすんじゃねえよ、ホモ野郎！」

創に後ろから引き離されたのも分からないままに、突き飛ばすようにして怒声を浴びせる。男に抱きしめられるだなんて！！しかもこの男に。その事実には秋登は身体が震える。

「明日の新聞が楽しみだな。お前も楽しみにしとけよ、これからの生活を」

「は!？」

「お前は俺のものだ。それを忘れるな」

強い瞳に怯む。そして一気に血の気が引く。

「っ!!!俺は!誰の所有物でもないっ!俺自身のものだっ!」

力のあらん限りに言い返した。それでも精一杯の強がりには身体の震えまで消してくれはしない。攻撃的な反論は虚勢ではない。

「恋愛的意味合いじゃない。管理下に置くということだ。何も利点がないわけじゃないだろ?よく考えろ。……これ以上、過去を弄られたくないのなら、尚更だ」

「おれは、……じゆう、なんだ。今は、まだ」

記憶の闇で押しつぶされそうな気がして、秋登は痛みで紛らわすように拳を握りしめた。

……今はまだ、自由なんだ。例え籠の中の鳥だとしても、約束の期限まではこの閉じられた楽園に自由に存在できる。かつて望んだ自由。手に入れたかったもの。

しかし望んだのはこんな形じゃなく、泪とともに、子どもたちとともに、創とともに……本当の自由の世界へ羽ばたくこと。不完全でも、望んだ。欠けてしまったものは元には戻らない。それでも、少

しでも繋がりをも、記憶を留めたかったのだ。

……会いたいよ、姉さん。
自由を体験したような涙が、秋登は羨ましかった。昔から、ずっと、憧れていた。

「過去をこれ以上弄り回されたくないのなら、俺に従うことだ。
行くぞ」

暗い色の瞳に射竦められ、喉の奥から音に鳴らない小さな悲鳴が出た。それは、心の軋む音によく似ていて……。
カツカツと来たときと同じ、硬質な音を立てて食堂を出て行く。カ
スタマイズしただろう制服の長い裾が華麗に翻る。

氣にくわれない。氣に触る。
動きづらそうなそれが似合っていることがそれを加速させる。

アレは例えば強烈な光だ。いつでも光を浴びていた存在。創の
ような柔らかな陽。俺のような真つ黒は創を眩しいと感じて憧れ、
男を相容れないと嫌う。

「秋登」

優しい声音に怖々と顔を上げれば、創が昔と同じ微笑を見せながら
手を差し出していた。それを遠慮がちにそれでもしっかりと手を握
る。その力強さが温かみを通して伝わってくるようで、すっと肩が
軽くなり膝に力が戻った気がした。

……やっぱり、俺の戻る場所はここだ。穏やかで、優しく包み込む
暖かな居場所。

「大丈夫だ」

秋登は低くつぶやき、グラスに残った水を飲み干した。それでも冷
えることのない感情と押さえ切れない想いをぶつけた。つまり、殴
る。

ボゴオツ!!!

握ったままの拳を壁にぶつけければ再び音がし始めた食堂に大きな破
砕音が響いた。

パラツと粉を落としながら凹んだ壁からゆっくり手をどける。

見れば、食堂で比較的近くにいた者たちが蜘蛛の巣状に割れの広がっている壁と秋登を見て顔を青くさせながら表情を引きつらせている。

「あ、秋橋……？」

「心配しなくていい、もう落ち着いた。アレは、可哀想な退化した動物と認識した」

未だに引き攣りこちらの様子を伺う、小動物たちのようになった食堂の生徒たちへと笑顔のまま言えば余計怯えさせたようだ。

「あれは脳味噌半端なく少ない。人間以下。あ、いや、オラウータンの方が可哀相か。社会生活を送れてるもんな。同種との関係を円滑に進められないなんて、何処の種族にも劣る」

……その後壁が崩れただなんて俺は知らない。知らないともさ。

外が丸写りとなり、風が適度を通り越しビル風の風圧を持って人々を襲ったという事実は後日、都市内新聞で発表された。その時は一時立ち入り禁止となり、皆が他の食堂やカフェに行った。（食堂と名のつく場は学内に3個、都市には大小合わせて7個あった）

「……秋橋も不憫な奴だね、“皇帝”に気に入られて」

「あれ、気に入られてるのか……？」

あれのどこを見てそう言うのか。そう思っているような表情をしている秋登に創は苦笑する。

……どんなに嫌がらせでもキスまでできないだろう、嫌いな相手に「好きな子を虐めたいと思うのは男の心理だよ？幼稚で精神が未熟だということの露呈でもあるけどね」

「佐竹も敵しいな」

「僕も同じだから。ね、ユウ」

「れいー？」

過ぎ去った嵐のことを忘れて、悠々と食事にありついていた雀が返事を返す。どうやら話は全く聞いてなかったらしい。

「なあ、アキ。そろそろ無視するの、止めるよ」

人気のない廊下での言葉だ。2人の会話を聞く者はいない。創は先ほどの争い前までの上機嫌をみせず、真剣な表情に硬い声音で問いかけた。

食堂はあれから不自然に静かな状態になり、秋登の気に障らないようビクビク伺いがなされた。そんな中、すっかり冷めてしまった食事を無言で後に残してきた。結局一口も手をつけていない。それもそうだ。近距離で殺気と嫌悪を浴びせられたら嫌でも気分は下がる。3人も食が進まないかのように、そのまま抜けてきた。

「俺、授業一緒に受けるって言っただけだ？」

……2人が居なくなつた途端にこれか。

授業が始まる間際なので、佐竹たちとは別行動に入っている。のに、こいつは離れようとしな。秋登は“はあ……”と内心ため息をつく。それ以外、何もできそうもなかった。

どうしてこうも頑固ばかり集まるのか。それは秋登にとって最大の謎かもしれない。

「惚けんなよ。……どうということなんだ、説明しろよっ」

創が腕を掴んで引き止めるが秋登は腕を振り払った。

「何でいきなり」

言葉は途切れた。力ない瞳は枯れた紅。絶望よりも深い諦念。腐臭さえ漂う闇にある暁。

「俺は“負け犬”だよ」

秋登が疲れた顔を見せれば、創には二の句が継げなかった。

何も知らず、何を言えるだろうか。少なくとも、自分は会長よりもこの幼馴染のことを知らない。今まで関わる事のなかったあの人物にこんな形で接触するとは。“負け犬” 会長はそう、呼んだ。

創は否定する言葉も湧かず、立ち尽くす。

秋登はあの男についての情報をこの短時間で既に得ていた。

生徒会長『桐由 葱』。この学校の理事を抜かした最高権力者だそうだ。成績優秀・実力有望・頭脳明晰、そしてやっぱり“俺様”。それは積極的行動を取った成果ではなく、周囲の輩が勝手に話していたのが卑下の言葉とともに入ってきただけだ。しかし、秋登は“敵”に関する情報は多くても困らないと考えていた。

性格は数度言葉を交わしただけの秋登にも十分に伝った。評価としては『可哀想なぐらいに自己中心』。“皇帝”“会長”“浅葱さま”などと呼ばれ『権力者』として学園生活において幅を利かせている。己より格下であると他人を評価し、見下す。近づくのも許さない。虫唾が走る。

その影響で、“話しかけられた”秋登を“凶々しく話しかけた”などと解釈・吹聴する者が既に出てきている。それでなくてもお粗末な理由で理不尽な侮蔑や恨み嫉みの視線や言葉を投げかけてくる者は多い。初日からこれじゃあ幸先が悪い。

だが、秋登はここで友人を作ることこの場を楽しむつもりもなかった。

逆にここに来た目的からは好都合、とさえ考えている。あえて接触を持つととする者が少ない今、目的のことを考えればこの状況は甘受すべき、喜ぶべきだ。感謝してもいいと思う。

「俺は別に……そういうこと、言っているんじゃない」

弱々しい声音だった。創に今さっきまでの勢いがなくなったのに対して秋登は心の中で思いが膨れあがる。じゃあなんだというんだ。その間が語っているじゃないか。逸らされた瞳に気づかないとでも？そんな言葉が思い浮かぶ。

「お前だって、知りたいんだろう？得体の知れない転校生、そして変わってしまった幼馴染、その正体を」

そう、問いかけの視線を投げて、意外にも真摯な瞳とぶつかる。

「俺は……ただ、お前が無事だっただけで、それだけでいいんだよ」
偽善だな。そう、思ったのに言葉は出なかった。その優しさが秋登には痛い。胸に響く。潜む苦味は追及したいことも覗かせているが、まっただきな事本心だとわかったから言葉がじわじわと沁みってくる。今更逃げ出したところで罪は拭えないと知っていて尚、そこから逃げた。耐えられなくなった。だから負け犬になったのだ。
「もう、勝手に消えるな。あの時のような思いは……したくないんだ」

俯く創は、伏せた視線で過去を想っているのだろう。

秋登たちは所謂幼馴染という関係だった。同じ都市、同じ町で育ち、問題がありつつも友人でいられた。会えなくなるなんて、考えるどころか想像もできなかった。

軍人輩出のエリート一家の息子。それが創だった。一方の秋登は、母が軍にいるわりに、祖母が軍嫌い。家族にもその思想は根付いていた。当然、身分違い。不相応。

周りからは歓迎されない。それでも秋登は創と一緒にいることを選んだ。一緒にいることで風当たりが強くなっても、2人一緒なら乗り越えていけると思った。何でもできると、あの頃は思っていた。泪を守ると、幼い心で決心を共にしていた。

皆、離れることはない、そう思っていたんだ。ずっと、このままだと、根拠もなく。

子供だったから許されていた部分もあったのだ。年を経るごとに大きくなる身分差は当人同士が許容するだけでは埋められないものになった。成長すれば認可できない、それが大人の考え。そして秋登も、祖母がなくなり、泪と共に他を養う立場にあることから言えば同じ意見だった。だからこそ、都合よかったのだ。施設育ちがお国のために役立つのだから。

7年前、秋登は強制的に連れて行かれた姉　　泪の後を追い、軍に

志願した。大量の金を子供たちに残して。

あの時の俺は闇雲に突っ走って、未来を知らなかった。

「……嫌なことを思い出した」

創に聞えないよう呟く。

表面では祖母のいなくなった俺等を見守る住人。けれど何の手助けもしないどころか、批判ばかり。小さな町の中で一度和を乱せば、それを排除しようとして全てが襲い掛かる。

よく考えなくても分かる。自然の自浄作業と同等の共同体が、軍の高級官僚旧家の息子と軍嫌いで娘までも追い出した孤児院経営のばあさんの教え子が一緒にいるところなど、当然良い印象を持たない……よく影響受けなかつたよな、こいつ。

ああ、でもこいつには聞かせないようにしていたっけ、と思い至る。聞いた後、自分のことでもないのに辛そうな顔をするから、守りたくなかった。それが秋登の最初のきっかけだ。創は家族と同じく、大切な人・守るべき対象となった。

力を求めた。守れる強さが欲しいと思った。せめて悲しい顔はさせたくない。だから、

「7年だ」

あれから、あの町から離れて、7年。

軍に入って強さを求めた。秋登にあるのはそれだけで、他は、……幸せなんてどこにもなかった。求めたところで見つかるはずもない。秋登は結局、それらから逃げた。皆を置いて、涙を助けると大義を掲げて、逃げ出した。

「俺たちが、俺が、その間で何をしてきたか知っているか？話したとして、理解できるのか？」

できるはずもない。それは常人には到底、想像さえできない領域。

苦痛、屈辱、悲嘆の狭間に立つのは、いつだって罪人。

……俺は、何をしたというのだろうか？俺と創、他の人たちはどう違うのだろうか？

何も変わらない。ただ、選ばれただけ。ただ、それが自らの手で選んだ道の先にあったということ。わかっていて、なお繰り返す疑問だった。

「お前は何していた？……もう、お前の知る俺じゃない。昔とは、違うんだ」

　　続くんだ、どこまでも。

路は変わることなく、徒人は明るい路を踏くことなく安全に渡りゆくというのに、闇の者は灯りのない路を傷つきながら、這いずってでも進んでいく。いつ途切れるとも知れない、踏み外す可能性がいつでも付きまとう。……そんな道を、秋登は歩かなければならない。正直、嫉妬する。憎しみさえ、持つ。大切だと思うのに、同等に悪感情が生まれるのだ。

「何も知らないお前がっ言う資格なんてない！干渉してこようとす
るな！」

「　っ！！」

創は急な怒声に驚き、大きく身を揺らした。

理解してくれない、そう思った。でも、同時に理解できないのは自分だと悟る。

何を見てきたのか、何を経験してきたのか、余りにも知らなすぎるのだ。資格がない、と言われてしまえば創はおしまいだった。反論したくても、納得してしまう。

ある時まで、創は幸せを生きてきた。今でも十分幸せの中を歩いてきている。小さな都市の小さな町。そこでそここの家に生まれて、憧れる父がいて、父のような立派な人になりたいと軍人を目指して。母は身体が弱かったけれども応援していて、訓練も厳しかったけれど色んな人が色んなことを教えてくれて。学校でも友だちが沢山いて、ライバルがいて、何不自由ない生活。

唯一つ。創は、子供たちを見つけた。

孤児。孤児院の子どもたち。秋登。それに泪。彼らと話して、いい人だっと思って、仲良くなりたくて、子どもたちばかりで頑張っている彼らが創には眩しかった。大人の制止を振り切って接触した。軍人を嫌う彼らは、でも優しく、やっぱりいい人で、相変わらず大人たちも両親も関わるなって言っただけ、ずっと一緒にいたくて。創は秋登と親友になった。泪は大切な人になった。孤児院の子たちとも仲良くなった。

なのにどうしてだろう。お祖母さんが死んで、崩れた。泪さんは軍に連れてかれた。秋登もついていった。子どもたちはバラバラになって町から出て行った。

悲しく寂しかった。でも死にたくなるほど苦しい思いをしたわけでもなく、楽しさを感じ、喜びを感じ、上辺だけでも平然と過ごし

てきた。相変わらず幸せな7年を過ごして、心の空虚を感じてもそれだけだった。思い返し、涙する事もなかった。

だから知らない。幸せしか知らない。秋登がどんな7年を過ごしてきたのか、知らない。どんな苦痛を覚えたのかも知らない。何を抱えるはめになったかも知らない。

俺が7年を過ごす間、秋登は何を感じてきたのか、知らない。きつと、俺は幸せで、秋登はそうじゃなかったということしか、分からない。何も言う資格なんてありはしない。

「……お前の、お前らの期待は、重いんだよ。……窒息、しそうで息苦しい」

離れないといけない。約束が、秋登の心に残っているから。創の心も守りたい。

せつかく会えたのに、こんな終りは嫌だ。

口から出るのは笑っちゃうぐらい本心と真逆。できるなら、出会わなければよかったんだ。その光に、燃え盛る炎に。そうしたら、闇夜に住む虫が惹かれ、飛び入ることもなかった。

「俺は、強くなんで、ないんだから。完璧じゃない」

親友だった。守ろうと思った。大切だ。傷つけない。だから関わってほしくない。

……完璧な人間がいるだろうか。実在するなら会ってみたい。俺も、完璧になれるだろうか。

秋登は昔、完璧だと呼ばれた。けれどそれは人形だった。忠実に任務をこなす。それだけのために存在していた。7年前、願ったのは守ること。だが実際は目標のために全てを投げ捨て、感情など知らぬと屈辱を耐え、思考を殺しきった。情に惑わされず、平静に冷静な判断を下す。

余計な感情を持たない。二つ名“操り人”のように生きていた。求めた強さとは違ったが、そこには強さがあった。しかし今はどうだ

ろっ。感情に捕われ振り回され脆弱・卑小・弱者の“負け犬”。それが今の秋登だ。背を向けた。強張っていただろう、後姿。「俺にくらい弱み見せろ、ってんだ……。意地っ張り」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2459y/>

sky ash

2011年11月20日19時14分発行